

第287回 令和8年9月9日（水）

「リーダーのビジョンについて」

リーダーというのは組織の大小にかかわらず、所属するメンバーを率いる立場にいる人間のことを指します。グローバルな視点を持ったリーダーの育成が本校のミッションなので、本日はリーダーの視野についてお話ししたいと思います。

私はリーダーには「三つの眼」が必要だと思っています。大事なはその「三つの眼」を必要に応じて使い分け、リーダーシップを選択することだと考えています。

「三つの眼」を比喻で説明すると「アリの眼」と「鳥の眼」と「太陽の眼」です。

「太陽の眼」は太陽から地球を見るビジョンです。戦争や飢餓、地球温暖化、大国によるポピュリズムの横行など、課題は山積しています。リーダーとして欠かしてはいけない視点であり、ほとんどの人が反対をせず賛同できるビジョンになります。（「地球温暖化」はフェイクだという人もいないわけではないのですが…）

「鳥の眼」はもう少し低い視点から地域などを見通すビジョンです。少子化や高齢化、地域によっては治安の問題や防災の課題もあるかもしれません。高校生が探究をする場合にはこの視野を身につけてほしいと思います。このビジョンになると意見は様々でてきます。また対立軸にある課題もあるので、検討には時間がかかります。

「アリの眼」はまさに足元の出来事。自分が働いている職場の環境や課題についての視点になります。身近なだけに緊急性、重要性とも非常に高く感じますが、実は「太陽の眼」の課題のほうこそ重要性、緊急性が高いこともあるので要注意です。

注意すべきは一度「アリの眼」になるとビジョンを高い視点に切り替えることが難しくなることです。アリは自分の目の前には敏感ですが頭の上のアンテナは感度が良くありません。「アリの眼」のまま10年も過ぎてしまうと前例踏襲型で取り残された組織になります。

リーダーは身近な課題に迅速かつ、応急的な処置をした後、組織のビジョンをできるだけ「太陽の眼」に上げなくてはなりません。「太陽の眼」の課題は組織が一丸になりやすく、個々の使命感が高まります。

「太陽の眼」のときはメンバーに任せて自主的に動くことが効果的ですが、緊急性の高い自然災害などが発生した場合は即「アリの眼」に切り替えて「指示」優先で組織を率いる必要があります。リーダーにはビジョンを適正に使い分ける技術を鍛えることが求められます。